

ラヴェル ボレロ Boléro

フランスの作曲家モーリス・ラヴェルが1928年に作曲した『ボレロ』(Boléro)は、同一のリズムが終始繰り返される中で2種類の旋律が交互に演奏され、徐々に楽器が増えて大きな大きなクレッシェンドを形作るという、極めて斬新で実験的なバレエ音楽です。「管弦楽の魔術師」と称されたラヴェルの緻密な計算と職人技が光る、クラシック音楽史上屈指の傑作として世界中で愛されています。

3つの大きな音楽的特徴

1. 169回繰り返される小太鼓のリズム最大の主演とも言えるのが、冒頭から曲の終わり近くまで、全く同じテンポ(3拍子)で一定のリズムを刻み続けるスネアドラム(小太鼓)です。この2小節パターンのリズムは、全曲を通して169回も執拗に繰り返されます。

2. たった「2つのメロディ」曲を構成する旋律は、以下の2種類(AとB)しかありません。
メロディA:フルートから始まる、明るく流れるようなダイナミックな旋律。
メロディB:民族音楽の影響を感じさせる、少し哀愁を帯びたシンコペーションの効いた旋律。
この2つのメロディが、形や音程を変えることなく「A → B → A → B…」と交互に計18回ほど繰り返されます。

3. 単調さを破る「音色の魔術」と大クレッシェンド、メロディもリズムも変わらないため、一見すると単調に思えますが、ラヴェルは「演奏する楽器を毎回変える」ことで聴衆を飽きさせません。最初は静かなソロから始まり、徐々に複数の楽器が組み合わせられ(パイプオルガンのストップを模した倍音の重ね方など)、最後はオーケストラ全員が咆哮する圧倒的なフォルテッシモへと上り詰めます。

●登場するソロ楽器のバトンリレー

曲の前半～中盤にかけて、主題はまるで楽器の見本市のように次々と受け渡されていきます。

- ・フルート(もっとも静かな始まり)
- ・クラリネットファゴット(高音域の難しいソロ)
- ・小クラリネット(E♭管)
- ・オーボエ・ダモーレ(珍しい古楽器)
- ・トランペット(ミュート付き)&フルートテナーサクソフ
- ・ソプラノサクソ(クラシックでは当時非常に珍しかった楽器)

ホルン&チェレスタトロンボーン(スライドを駆使する難所中の難所)

後半はこれらが複雑に重なり合い、音の厚みを増していきます。

●誕生の背景とバレエのあらすじ

誕生のきっかけ:ロシアの有名な舞踏家イダ・ルビンシュタインから「スペイン風のバレエ音楽」を委嘱されたことで書かれました。当時スランプ気味だったラヴェルですが、工場を経営していた父親の影響もあり、機械の規則的な動きやリフレインからこの着想を得たと言われています。バレエのあらすじ:セビリアの静かな酒場が舞台。中央のテーブルの上で、1人の踊り子がステップを刻み始めます。最初は無関心だった周囲の客たち(オーケストラの楽器たち)が、踊りの熱量が高まるにつれて1人、また1人と巻き込まれていき、最後は全員で狂気的な大乱舞(大団円)を迎えます。

●衝撃のラスト

約15分間、頑なに「ハ長調(C major)」を守り続けてきた曲ですが、最後の最後で突然「ホ長調(E major)」へと転調します。

この一瞬のギアチェンジによって音楽的なカタルシスが爆発し、シンバルやゴングが鳴り響く中で、崩壊を思わせる劇的な結末を迎えます。

1. シルヴィ・ギエム主演 東京バレエ団 振付：モーリス・ベジャール
収録 2009年2月9日 東京五反田ゆうぽうとホール
NHK教育テレビ NHK芸術劇場 2009年3月20日放送・録画

シルヴィ・ギエム (Sylvie Guillem, 1965年2月25日-) は、フランス・パリ生まれのバレエダンサー。100年にひとりの天才プリマといわれるギエムは、12歳の時、体操競技で五輪国内予選を通過するほどの身体能力を持ちながら、バレエに転向。デビュー以来、数々の伝説を残してきました。パリ・オペラ座時代の史上最年少でのエトワール昇級や、英国ロイヤル・バレエ団への移籍でフランス政府をして「国家的損失」と言わしめるなど、常に世界の注目を集めてきました。古典を極め、演劇的な作品やコンテンポラリーに挑み、伝統に縛られない演技で世界的な活動を続けてきたこれまでにないバレエ界のスーパースター。2011年の東日本大震災時には被災者のためにチャリティー公演を実施。来日30回を超える親日家としても知られています。

2. 日本音楽集団 指揮：荒谷俊治 編曲：池辺晋一郎
録音：1987年6月29日 浦安市文化会館ホール
池辺晋一郎による 緻密なアレンジに瞠目！ CD「ボレロ・ジャポネスク」 K32X 4002

日本音楽集団 (欧名:Pro Musica Nipponia) は、1964年創立の邦楽器演奏グループである。三木稔、長澤勝俊らの作品を初めとした現代邦楽をレパートリーとしている。

録音について 長岡鉄男 (CDライナーノートより転記)

ところで、この「ボレロ・ジャポネスク」というCDはこれまでの国内盤の邦楽とも、外盤の邦楽とも違ったユニークな編成、選曲、録音で注目すべきものといえる。録音だけについていうと、従来の国内盤と違うのは、音像が小さいこと。音に濁りがないこと。透明できれいな音で、合奏でも音が荒れず、ポルタメント風、シンコペーション風のためらいがちなメロディと揺れ動くハーモニーがよくとらえられている。奥行き感もたいへんよく出ており。はるか彼方で小さく鳴る拍子木や鼓の雰囲気がいい。ボレロのラストでドスンと響く和太鼓も超低域までの伸びはないが、芯のあるハードなサウンドはティンパニーやグランカッサとはひと味違うものを持っている。2本のメインマイクと20本の補助マイクという構成がうまく生かされている。スタジオではなく、浦安市文化会館を使ったというのもよかったと思う。



次にお見せする2つの演奏会映像、ボレロはその最後を飾った曲ですが、音楽評論家になったおつもりで厳正な評価を下してください。

(集録時、カラヤンは77歳、ムーティは50歳)

- 全体的に、どちらの演奏がボレロに相応しいか？
- 両指揮者の曲へのアプローチ、リズム／メロディ。クライマックスへの運び、構築性／情熱
- ベルリンフィルとウィーンフィルの相違・好み
- 演奏会場、映像演出について
- 実際に演奏会に行くとしたら。どちらに？

3. ヘルベルト・カラヤン指揮 ベルリンフィル
New Year'Eve Concert 1985
収録 1985年 12月31日 ベルリン ベルリンフィルハーモニー LD SRLM 980
4. リッカルド・ムーティ指揮 ウィーンフィル
ウィーンフィル創立一五〇周年記念コンサート
収録 1992年 3月22日 ウィーン ムジークフェラインザール LD SRLM 1057